



今秋の東京での個展に合わせて、これまでの仕事を本にまとめたいと語る岡本光博(京都市北区)

ら撤去された。「本物が偽物か分からぬクオリティーでない」と意味がない。法律を犯すのは絶対だが、著作権など法が

京都市北区のアトリエは、キヤラクターグッズや商品であふれていた。消費社会の象徴であるロゴやキャラ。美術家岡本光博(1968年〜)はそうしたものを材料に、先鋭的にアートの豊かな可能性を探ってきた。「批評というより、もともとは言葉遊び、タジャレなんです」と笑う。

2010年、作品が社会的な脚光を浴びた。ルイ・ヴィトンなどブランド5社の柄やロゴが入った生地 of 立体バッタ「バッタもん」。ファッション界が直面するオリジナルとコピーの問題を提起したが、「コピー商品」とのヴィトンの要請で展覧会か

# アトリエ トーク

美術家

岡本 光博

## 共同幻想を揺さぶりたい



(未確認墜落物体)

追いついていない。アートは自主規制せず、そのグレーな部分を問いかけるべきだ」

滋賀大学院教育学修了後、欧米での滞在経験に原点がある。ドイツでの「ユーロリング・プロジェクト」だ。ユーロ通貨が普及した時期、硬貨に穴を空け、輪に刻まれた星のマークだけにする。くりぬいた部分は、ドイツではナチスも使ったワシ、スペインは国王の肖像が描かれていた。「国境をなくそう」といながら、ナショナルアイデンティティーが高まった。どないやねん」と。開催に反対の声も多い中、アートセンターの監修者は言った。「アートは政治や経済や法律より上にあるべき。封じ込めるのは間違いだ。社会に投げかけよう」。反応は賛否さまざまだった。「欧州では、アートは議論するもの。美の追求より、生き方や社会との関わ

り、精神を問うんです」  
若い作家がギリギリでも社会に問いを投げかけられるスペースを、と12年、市内にギャラリーを開いた。「KUNST ARZT」。ドイツ語で「芸術 医者」という意味だ。昨年5月、満を持して「ディズニー美術」展を企画した。「美術関係者からディズニーには絶対触るな」と言われていた。著作権に厳しいとされてきたからだ。ネットでも裁判沙汰になるとか、不確かな情報が流れていた。腹をくくり、長年ディズニーを題材にする福田美蘭ら作家6組に依頼。アニメキヤラを用いた作品を展示した。

「スターウォーズをはじめ、数多くの有名キヤラクターの権利はディズニーが持っている。子どもが描いたり、シンボルやキヤラと触れ合えないのはいびつな社会。著作権とかビジネスの物差しで息苦しくするのはおかしい」。展覧会には、米国からディズニーの関係者も訪れた。「フレンドリーに見てくれた。ディズニーは著作権侵害の海賊版と社会表現は違うと、線を引いてくれた。モラルを議論すれば文化的な厚みになる。怖いのは、勝手な思い込みと自主規制」。それは戦争もテロも風評被害も同じ。「共同幻想を揺さぶりたい。それがアートの魅力」と力を込めた。(河村亮)